

- 問1 645年、中大兄皇子や中臣鎌足らが蘇我氏をたおしたことをきっかけに始まった政治改革では、どのような国家体制を目指したか。最も適切なものを選びなさい。 (2019年 香川県公立入試 類似)
1. 有力な豪族による合議制に基づいた政治
 2. 外国の王をトップに据えた国際的な統治
 3. 天皇を中心とした中央集権的な国づくり
 4. 武士が政治の実権を握る封建的な仕組み
- 問2 7世紀半ば、朝鮮半島では新羅が唐と結んで勢力を広げ、百済を滅ぼしました。これを受けて、当時の日本（倭国）がとった行動とその結果として正しいものはどれですか。 (2015年 佐賀県公立入試 類似)
1. 高句麗の再興を支援するために朝鮮半島へ大軍を送ったが、白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に大敗した。
 2. 元（モンゴル帝国）の侵攻を阻止するために朝鮮半島へ出兵したが、文永の役で大敗を喫した。
 3. 唐と結んで朝鮮半島での権益を確保しようとしたが、白村江の戦いで新羅の軍勢に敗北した。
 4. 百済の再興を支援するために朝鮮半島へ大軍を送ったが、白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に大敗した。
- 問3 天武天皇による律令国家の形成過程において、その政治的な背景や仕組みについて述べた文として、最も適切なものはどれですか。 (2017年 京都府公立入試 類似)
1. 唐の軍隊が九州に侵攻してきたため、防衛を目的として大宰府に防人を配置し、水城を築いた。
 2. 班田収授法を廃止することで、地方の有力者が独自に土地を開発し、私有化することを奨励した。
 3. 壬申の乱で有力豪族を抑えて勝利したことで、貴族に頼らない天皇中心の強力な政治体制が可能になった。
 4. 摂政や閑白といった役職を設けることで、藤原氏などの有力な貴族と協力して政治を行う体制を整えた。
- 問4 聖徳太子が小野妹子を隋へ派遣した目的として、当時の日本の政治状況や国づくりの方針を踏まえた説明として最も適切なものはどれですか。 (2015年 大分県公立入試 類似)
1. 中国の進んだ制度や文化を直接取り入れ、天皇を中心とする中央集権的な国づくりを進めるため
 2. 大宝律令を完成させるために、中国の法律の専門家を日本に招く交渉を行うため
 3. 卑弥呼がかつて受けた「親魏倭王」のような称号を隋の皇帝から授かり、国内の統治を安定させるため
 4. 菅原道真の建議に基づき、危険な渡海を伴う外交を縮小するための事前調査を行うため
- 問5 飛鳥時代に推古天皇の摂政であった聖徳太子（厩戸王）が、役人の政治に対する心がまえを説くために制定した法は何ですか。「和をもって貴しとなし、さからうことなきを宗となせ」という、人々の和を尊重し、争わないことを第一に掲げたものを選びなさい。 (2022年 沖縄県公立入試 類似)
1. 武家諸法度
 2. 御成敗式目
 3. 五箇条の御誓文
 4. 十七条の憲法
- 問6 大化の改新から始まる律令国家の形成過程において、天智天皇の死後の後継者争いに勝利した天武天皇が、その後の政治で目指したこととして最も適切な説明はどれか。 (2018年 岡山県公立入試 類似)
1. 仏教の力を借りて、地方の豪族に土地の私有を認めること。
 2. 遣唐使の派遣を停止し、日本独自の国風文化を広めること。
 3. 天皇の権威を強め、法に基づき全国を直接統治する中央集権体制を確立すること。
 4. 武士の協力を得て、朝廷の警備を強化し、新しい幕府を開くこと。
- 問7 607年に小野妹子が中国へ渡った際の外交の目的と、当時の日本がとった姿勢について説明した文として、最も適切なものを選びなさい。 (2024年 福島県公立入試 類似)
1. 中国の皇帝に貢ぎ物を届けることで、朝鮮半島の諸国に対する日本の軍事的な支配権を認めてもらおうとした。
 2. 中国の王朝に対して対等な立場での外交を求め、進んだ制度や文化を主体的に取り入れようとした。
 3. 隋の皇帝から「親魏倭王」の称号を授かることで、国内の有力な豪族たちを抑え、天皇の権威を誇示しようとした。
 4. 唐の優れた律令をそのまま模倣して導入し、貴族の合議制に基づく新しい政治体制を確立しようとした。
- 問8 飛鳥時代に遣隋使が派遣された背景や目的について説明した文として、最も適切なものを選択してください。 (2017年 大分県公立入試 類似)
1. 朝鮮半島での戦いを有利に進めるため、中国の軍事的な援助を直接受けることを目的とした。
 2. 中国の進んだ制度や文化を取り入れることで、天皇を中心とする中央集権国家の形成を目指した。
 3. 仏教を日本から中国へ広めるために、聖徳太子自らが選んだ高僧を派遣した。
 4. 中国との貿易において、日本産の銀や銅を輸出して経済的な利益を独占しようとした。
- 問9 7世紀後半、日本（倭国）は朝鮮半島の西南部に位置する地域へ大規模な軍隊を派遣し、唐・新羅の連合軍と衝突しました。この戦いが起こった直接的な目的として、最も適切な説明はどれですか。 (2020年 和歌山県公立入試 類似)
1. 博多に侵攻してきた元の軍隊を、朝鮮半島の拠点で迎え撃つため
 2. 新羅と軍事同盟を結び、半島北部の高句麗を制圧するため
 3. 友好関係にあり、当時滅亡していた百済の復興を支援するため
 4. 九州北部を襲撃した刀伊と呼ばれる集団の正体を突き止めるため
- 問10 7世紀から8世紀にかけて、日本は天皇を中心とする中央集権的な律令国家の形成を目指した。この過程で起きた「大化の改新」「壬申の乱」「大宝律令の制定」の3つの出来事を、発生した時期が古いものから順に並べたものとして正しいものはどれか。 (2018年 熊本県公立入試 類似)
1. 壬申の乱 → 大化の改新 → 大宝律令の制定
 2. 大化の改新 → 大宝律令の制定 → 壬申の乱
 3. 大化の改新 → 壬申の乱 → 大宝律令の制定
 4. 大宝律令の制定 → 壬申の乱 → 大化の改新
- 問11 飛鳥時代に建立された豪族寺院について、その特徴を正しく述べたものはどれですか。 (2021年 島根県公立入試 類似)
1. 聖徳太子による仏教振興を背景に、豪族たちが勢力の大きさをアピールするために建てた。
 2. 平安貴族が浄土への憧れから、寝殿造の様式を取り入れた華麗な庭園とともに建てた。
 3. 国ごとに国分寺と対になる形で設置され、女性の僧侶が修行する場所として建てた。
 4. 遣唐使によってもたらされた最新の禅宗を広めるため、幕府の全面的な支援を受けて建てた。
- 問12 小野妹子が中国の王朝である隋へ派遣された際、聖徳太子は「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す…」という内容の国書を持たせました。この記述から読み取れる、当時の日本が隋に対してどのような外交姿勢をとうろとしていたか、最も適切なものを選びなさい。 (2021年 三重県公立入試 類似)
1. 隋の皇帝に従属し、周辺諸国の支配権を認めてもらう姿勢
 2. 隋と対等な立場での国交を結び、独自の地位を築こうとする姿勢
 3. 隋の文化を拒絶し、日本独自の鎖国体制を築こうとする姿勢
 4. 隋の皇帝に対して臣下としての礼を尽くし、称号を求める姿勢

答え合わせ・解説

問1	答え 3 天皇を中心とした中央集権的な国づくり	蘇我氏を打倒した後には始まった大化の改新は、それまで有力豪族が持っていた権力を集約し、天皇を中心とした新しい国づくりを目指すものでした。この改革により、土地や人民を国家が直接支配する「公地公民」などの制度が整えられていきました。
問2	答え 4 百済の再興を支援するために朝鮮半島へ大軍を送ったが、白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に大敗した。	当時の朝鮮半島では、唐と新羅が連合して百済や高句麗を圧迫していました。660年に百済が滅亡すると、日本は古くから交流のあった百済の再興を助けるために朝鮮半島へ出兵しました。しかし、663年に錦江の河口付近（白村江）で行われた戦いにおいて、唐・新羅の連合軍に圧倒的な軍事力の差で敗れました。これにより、日本は朝鮮半島における拠点を完全に失うこととなりました。
問3	答え 3 壬申の乱で有力豪族を抑えて勝利したことで、貴族に頼らない天皇中心の強力な政治体制が可能になった。	天武天皇は、武力によって皇位継承争いを制したため、それまでの有力豪族の影響を抑え、自らに権力を集中させることができました。これが後の大宝律令へとつながる中央集権体制の基盤となりました。摂関政治や防人の配置（白村江の戦い後）、班田収授法の形骸化は、それぞれ異なる時代や背景に基づいています。
問4	答え 1 中国の進んだ制度や文化を直接取り入れ、天皇を中心とする中央集権的な国づくりを進めるため	当時の日本は、豪族が強い勢力を持つ体制から、天皇を中心とした組織的な国家への転換を目指していました。冠位十二階や十七条の憲法の制定と並行して行われた遣隋使の派遣は、中国の官僚制や仏教精神を学ぶことで、強力な国家体制を築くための重要な手段でした。なお、大宝律令は8世紀、遣唐使の停止（菅原道真の建議）は9世紀の出来事であり、卑弥呼は3世紀の人物です。
問5	答え 4 十七条の憲法	聖徳太子は、冠位十二階の制定とともに「十七条の憲法」を定め、天皇を中心とする中央集権国家の基盤を整えようとしていました。この法は現在の憲法とは異なり、役人が守るべき道徳的な訓戒としての性格が強く、特に第一条で説かれた「和」の精神は、豪族間の争いを鎮める意図がありました。
問6	答え 3 天皇の権威を強め、法に基づき全国を直接統治する中央集権体制を確立すること。	壬申の乱で勝利した天武天皇は、天皇の力を背景に、法に基づき天皇が全国を直接支配する「中央集権国家」の完成を目指しました。この流れは、その後の持統天皇や、大宝律令の完成へとつながる重要な過程となりました。
問7	答え 2 中国の王朝に対して対等な立場での外交を求め、進んだ制度や文化を主体的に取り入れようとした。	聖徳太子による遣隋使の派遣は、従来の中国を中心とした冊封体制（貢ぎ物をして臣下となる形式）から脱却し、対等な立場での国交を開こうとした点に大きな特徴があります。これにより、中国の進んだ仏教文化や政治制度を日本の国情に合わせて導入し、中央集権国家の基盤を固めることを目的としました。「親魏倭王」は弥生時代の卑弥呼に関する記述です。
問8	答え 2 中国の進んだ制度や文化を取り入れることで、天皇を中心とする中央集権国家の形成を目指した。	当時の日本は、冠位十二階や十七条の憲法の制定など、国内の政治体制を整える必要があった。そのため、中国の進んだ政治制度や文化を吸収し、国内の豪族を統制して天皇中心の政治を確立することが派遣の大きな目的であった。
問9	答え 3 友好関係にあり、当時滅亡していた百済の復興を支援するため	飛鳥時代の663年、日本は友好国であった百済の復興を助けるために大軍を派遣しましたが、唐・新羅の連合軍に白村江の戦いで大敗しました。この敗北を受け、日本は唐・新羅による本土侵攻を恐れ、大宰府の北側に水城を築いたり、各地に朝鮮式山城を作ったりして防衛体制を急いで整えることとなりました。選択肢にある「元」や「刀伊」は、それぞれ鎌倉時代や平安時代の中期の出来事であり、時代背景が異なります。
問10	答え 3 大化の改新 → 壬申の乱 → 大宝律令の制定	645年の大化の改新によって蘇我氏が倒され、天皇中心の政治への転換が始まり、公地公民の原則が示された。その後、672年の壬申の乱に勝利した天武天皇が強力な権力を握り、中央集権化を加速させた。その一連の流れの到達点として、701年に本格的な律令である大宝律令が制定され、法に基づいた統治体制が整った。
問11	答え 1 聖徳太子による仏教振興を背景に、豪族たちが勢力の大きさをアピールするために建てた。	飛鳥時代、聖徳太子が仏教を厚く保護し政治の柱としたことで、蘇我氏などの豪族もこれに倣いました。当時、大規模な寺院を建立することは、高度な建築技術や大陸の文化を所有していることの証明であり、自らの権威を内外に示す手段でもありました。奈良時代の聖武天皇による国分寺建立が「国家の安泰」を目的とした公的な性格を持つのにに対し、飛鳥時代の寺院は「豪族の権威付け」という私的な性格が強いのが特徴です。
問12	答え 2 隋と対等な立場での国交を結び、独自の地位を築こうとする姿勢	聖徳太子は、当時の中国を中心とした国際秩序（冊封体制）に従うのではなく、日本を「日出づる処」、隋を「日没する処」と表現し、双方の君主を「天子」と呼ぶことで、対等な立場で外交を行おうとしました。これには、隋の力を背景にせずとも自立した国家であることを示す意図がありました。